

学校自己評価システムシート (平成29年度)

目指す学校像	・音楽芸術の一貫教育を通じ、情操豊かな人格の形成を目指す	学校名	東邦音楽大学附属東邦第二高等学校
本年度の重点目標	・生徒の学力、学習への取り組み方（姿勢）を把握し、自主的な学習意欲を喚起させる。 ・基本的学習習慣の確立（①整理整頓 ②携帯電話の適切な使い方の指導） ・音楽を通して地域貢献活動の活性化	課程	全日制・音楽科

年度目標				中間評価	年度評価		
領域	評価項目	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
学習指導	○ 生徒の学力、学習状況を正確に把握し、自主的な学習意欲を喚起させる。特に、専攻実技の指導に当たっては、生徒に『習う』という意識だけでなく『自ら考えて、様々な演奏課題の問題解決に自ら取り組み姿勢』の養成に取り組む	・専攻実技の指導に於いて、日々多様化している個々の生徒の日々の学習状況の把握とその指導計画を更に細部に渡って検討する必要があった。例えば、専攻実技を進めて行く上で、その基礎力であるソルフェージュの基本が身に付いていない現状が認められた。その他、生徒の音楽の基礎学力の養成に如何に取り組みか、その上で専攻実技に対するモチベーションを如何に高めていくかが課題となっていた。	・専攻実技担当者は個々の生徒の実情にあった年間指導計画に従って、計画的な指導を行った。ここで、一対一のレッスンにおいて、十分なコミュニケーションを取ることで、良くできている所は評価し、課題となるものに対しては指導者と生徒がともに努力してそれをクリアーしていく努力が必要とされた。	・専攻実技担当者は『毎時間のレッスンのポイント』と『レッスン終了後のその達成度』をお互いに確認し、それを踏まえて次回のレッスンまでの課題を生徒に提示し、適切なアドバイスのもとに自らの力でその具体的な目標を達成することで、生徒の学習意欲を喚起させた。	・前期実技試験終了後、学習してきた内容が、試験でどのように反映されたかを、いくつかの観点から、実技担当者として生徒で検討してみた。特に、基礎的な部分で試験でクリアーされたかどうかを、学習を進めてきた経験を振り返る事により検証していった。	A	・3年生は3年間の集大成として『卒業演奏』に合格することで、専攻実技の学習が修了したこととなり、卒業要件を満たすこととなった。1、2年生に対する指導に於いては、次年度への課題に準備が始まる前に、今年度の指導の経緯をレッスン記録簿により個々の生徒の取り組み状況を確認する。生徒個々の特性を生かした指導が次年度に向けて出来るよう改善していく。
	○ 基礎学力の定着と充実・多角的な学習評価	・生徒の一般教科・科目への学習への意欲が、消極的な現状があった。従って、その指導に於いては先ず『国語力』の充実を図る。外国語と同様で、4つのスキル（聞く、話す、読む、書く）の基礎力（言語運用能力）の養成を『国語総合』を通して養う。更に、学力差が大きい『数学』『英語』などの指導に於いては、クラス授業と並行して、その教科の基礎力が不十分な生徒に対しては『個別指導』の実施を検討していった。	・各教科・科目の特性を生かした、分かり易い授業内容の指導を検討することにより、生徒の授業に対する“興味・関心”に変化が現れ、授業への集中度・理解度に向上が認められた。そして、次の段階として学習した内容を如何に定着させ、更に運用できるように指導していくかが課題となった。	・各教科・科目の試験の結果だけでなく、課題・レポートの提出状況とその結果から、生徒が自主的に物事を考え、それらをまとめる力が徐々に上がってきていることが認められつつあった。しかし、更なる『基礎学力』の充実を目指して、『学習効率を上げる為の授業の創意工夫』と『生徒が自ら学ぶ姿勢』の育成を目指すこととした。	・基礎学力の定着と充実を図る為に『現状の把握』と『課題の明確化』そして『課題をクリアーする方策』へと取り組んできた結果として、『生徒の学習への取り組み姿勢』に改善が認められつつあった。学習指導におけるPDCAサイクルは、各教科・科目に於いて概ね機能しているものの、『高等学校・音楽科』の『カリキュラム全体』の中でPDCAサイクルをどのように生かしていくかは、今後の大きな課題であるとともに、『高等学校・音楽科』の『在り方』の中で、検討されるべき問題でもあった。	・一般教科・科目も評価に当たっては、学習の到達度：『知識や技能の到達度』+『自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力』の評価を基本とした。学習に対する『意欲・関心・態度』の評価を基本とする。この評価は日々の学習への細かい指導を通して、概ね成果が認められていた。	・生徒の学習に対する『意欲・関心・態度』を評価するノート、課題、レポートの提出に関しては、教科担当教員と担任との連携で、提出率は各学年・全ての教科に於いて100%に達している。これは、生徒の基本的な学習習慣を確立する上で大きく貢献していた。次年度は、年々変化していく生徒の学習意欲の傾向を分析し、更なる方策を検討していく。次のステップとしては、自らの力で『自分にとっての様々な課題』を解決していく『自己問題解決能力』を如何に身に付けさせるかが課題である。
生徒指導	○ 基本的学習習慣の確立 整理整頓の指導の指導	・生徒各自の所有物の自己管理がきちんとされていない現状があった。ノート、授業中に配布されたプリント、課題、宿題のプリント等が整理されないまま机に出たままの状態が帰宅している状況が見受けられた。また、授業、学習の効率を考えると、教材類が不備である状態が『授業をうける姿勢』が確立されていないと認識でき、重要な問題と考えられた。	・生徒が自己所有物の整理・整頓という生活習慣を身に付けていない。生徒に各自の個人ロッカーを有効活用する等として、『物の大切さ』を認識させ、自己管理の習慣が定着するよう指導することとした。	・HRの担任が生徒の下校した後、生徒の机を確認。出しっぱなしである私物は職員室へ保管し、翌朝生徒に慎重に注意と指導を継続していく対応をすることによって、状況は改善しつつあった。また、生徒によっては机の中に雑然とテキスト、ノートなどが入れられており整頓されていない状況が認められた。	・担任だけでなく、各教科担当者からも授業中使用するプリント、課題、レポートなど、各自の責任で整理整頓して管理すること指導を実施することとした。その結果、試験前に必要なプリントを紛失したことで、試験の準備に支障をきたすこと、課題のプリントを提出日に出せない生徒は減少してきた。	B	・基本的な学校生活（家庭生活）も含めてである、『整理整頓』とは、学習面に顕著に現れている。この生活習慣が身に付いている生徒は、各教科のノートも『要点が整理され、まとめられており、その取り方も自分なりに易いように創意工夫されている。』従って、それが試験勉強を効果的に進められ、その結果が評価として現れている。次年度も『整理整頓』は、生徒指導の指導項目とし、継続して指導していくこととする。
	○ 携帯電話の安全かつ適切な使い方の指導	・携帯電話の校内への持ち込みは許可制としている。秩序ある使い方の指導をHRや全校集会で指導した。『SNS』は使い方の指導によって生徒間の健全な交友関係を妨げる起因となる可能性がある。その使用の危険性をHR、全校集会で継続して指導していくこととした。	・携帯電話は各クラス、朝のHRで担任に提出、帰りのHRで担任より返却、校内での使用は禁止している。あくまで、登下校時の安全確保をその使用目的を趣旨としている。	・概ね、携帯電話の提出・返却に関して徹底出来ている。最近では、家庭で携帯電話を私用してのSNSなどの使用方法の指導に難しさを感じるため父母との協力は不可欠であり、保護者との共通理解を基に進めていく。	・最近、SNSへの不適切な内容の書き込みによるトラブルは減少してきた。しかし、その危険性について、HR・全校集会で生徒指導主任より厳重な指導を継続した。	・生徒は各自の所有物の整理整頓の習慣は少しずつ身につけてきた。『物を大切にする』という基本的な意味が、全ての生徒に理解されていない為、『整理整頓』の指導の徹底が難しい現状があった。	・SNSへの不適切な内容の書き込みに関しては、学校として完全に把握することが難しく、その対応に苦慮した。これは、『生徒の日常の友人間でのコミュニケーションがスムーズに行われていないこと』『生徒を取り巻く社会情勢』『家庭環境の多様化』『信頼関係の在り方』など、その他多くの要因があると思われる。これへの対応は、『総合学習の時間』を利用して『人間関係の在り方』『集団生活の意義』等々、『基本的な社会生活の在り方』の教育を検討して行くこととした。
進路指導	○ 附属高校から系列大学・短大への進路指導	・一貫教育の充実を図る為に、高校1年生より3年間にわたり、大学・短大との連携を基に組織的な進路指導を図っていった。	・『大学・短大進学講座』は各学年での状況に合わせて、企画され専攻・コースの紹介がされた。	・附属生にとって『大学・短大進学講座』がどのような位置づけになっているか、又、各自が将来勉強していくとする分野を考える良いチャンスとなっているかどうかを検証していくこととした。	・『大学・短大進学講座』を高校生が受講することによって、将来、『音楽を生かした社会との関わり』を高校生時代から意識して考え、自己の将来何に取り組んでいったらよいかの方針を立てる上でヒントにもなっていた。	A	・高校生もその父母も、大学・短大を卒業した後の具体的な社会との関わり部分を知りたいという見据えて進路決定をする傾向が強まっている。『大学・短大ではどのような人材を育て、その育成のためにどのような指導・教育がなされているのか』を具体的に分かりやすく、どのように高校生とその父母に示していくかが大きな課題である。来年度も『大・短大進学講座』と並行して『体験授業』を充実させ附属高校生にとって将来を見据えたより良い進路指導を目指していくこととする。
	○ 音楽を組織化した教育システムによりその技術・表現力を高校3年間と大学4年間で養成していく	・今年度は新たに大学・短大の『体験授業』を附属高校生に実施し、具体的な『教育の状況』を体験させた。	・『体験学習』は生徒は自分の興味のある講座を選び受講することで具体的な大学・短大での授業が体験できた。	・『体験授業』は具体的な『大学・短大の授業』を受講することで、現在高校で学習している音楽専門教科がどの様に、大学・短大に生かされ、更にそれがどのように発展・展開されていくかを体験できることで、学習へのモチベーションをかなり向上させていた。	・『体験授業』で学んだことを更に興味を持った生徒達は、高校と同じキャンパスにある大学の教員の研究室を訪れ、今日『授業を受けた内容』『自分が将来取り組んで行きたい分野』に関して質問するなど生徒が自主的に将来研究したい領域を模索する良い機会となっていた。	・今年度からスタートした『体験授業』、一までの『大学・短大進学講座』の内容を具体的に掘り下げたもので、高校3年生に『大学・短大』の教育内容理解する上で効果であった。当初の目的は概ね達成できたことと認識できた。	・『体験授業』は予想以上に生徒の『音楽』に対する視野を広げること、又、深く探究することに大きな影響を与えていた。高大連携という視点から考えても大きく貢献できていると認められている。
全般	○ プロ・オペラ公演に東邦第二高等学校が参加（実践的舞台芸術経験）	・4月にオペラ主催、オペラ『トゥーランドット』への出演依頼が東邦音大・短大・東邦第二高等学校にあり、『合唱』での参加が決定する。	・8月より稽古が始まり、生徒達は全く初めての曲に挑戦することとなる。勿論、全体の稽古以外に第二高校の音楽専攻の専任教諭が放課後等、学内で合唱の基礎練習をきめ細かく実施し、それを全体練習に生かせるように指導した。	・10月からの立ち稽古では、プロで活躍されているソプラノの佐藤美枝子さん、鈴木慶江、テノールの村上敬明氏、東邦音大の佐藤泰弘氏が参加された。そのようなプロの中で、生徒達は相当の緊張感を感じながら演技と歌に意欲的に取り組んでいた。	・11月の本番が近づいていき、衣装合わせやオケ合わせと、オペラが仕上がって行く中で、生徒達は見違えるように生き生きと歌い演じることが出来るようになって来た。	A	・来年度もオペラ彩り、ブッチェーニのオペラ『トゥスカ』への出演依頼が東邦音大・短大・東邦第二高等学校にあり、『合唱』での参加が決定する。原語による合唱の実践、又、舞台芸術の貴重な体験が個々の生徒の『音楽力』の育成に活かされる大きなチャンスとなっている。
	○ ボランティア活動とその具体化についての再検討	・ボランティア演奏会の実施。 南古谷病院でのミニコンサート：ソロ、アンサンブル(29.6.8) 帯津三歌病院でのクリスマス・ミニコンサート：ソロ、アンサンブル(29.12.21)（ボランティア活動の内容と活動範囲を検討した）	・ボランティア演奏会の実施計画の作成 演奏者は会議で選考し、演奏形態・演奏曲目は各演奏会ごとに検討した。	・ボランティア演奏会は生徒達にボランティアの意義を認識させると共に、生徒達はその場に相応しい演奏の在り方を創意工夫しその演奏の準備に自主的に取り組んでいる姿勢が見受けられた。生徒達は、改めて『ボランティア』とは何か、その活動とはどのようにあるべきかを考察していた。	・ボランティア活動を通して、生徒は人に対する思いやりと、チームワークの大切さを学んだ。『ボランティア』自体の提議はあるが、それを生徒がこれまでの自己の体験でどのように受け止めてきたかの難しさがあった。	・本番の2日間は大盛況で会場、サンアゼリア（和光市）は熱気に溢れていた。生徒達は意外と落ち着き、稽古の時より役になりきり声高々に個々の役を立派にこなしていた。	・来年度も『ボランティア活動』は『演奏会』のみに限定せず、様々な形態を検討し、更なる充実と推進に努めることとする。
	○ 地域貢献を目指した演奏活動、また、公立中学校と本校ウインドオーケストラによる実技指導やアンサンブル演奏会を通しての交流	・南古谷ウインドオーケストラの活動 （南古谷地区中学生との活動） ・南古谷ニューイヤーコンサート （南古谷地区の小・中・高等学校、また地域住民との活動）	・南古谷ウインドオーケストラの活動 毎週土曜日の午後、近隣の中学生、高校生、本校の生徒等によって構成されている。南古谷ウインドオーケストラの活動は地域の『音楽芸術』の普及に大きく貢献している。 ・ニューイヤーコンサートin南古谷への出演 （南古谷及び第二高校ウインドオーケストラ・合唱の演奏）	・毎週土曜日の午後、東邦音楽大学での地域の中核生・高校生・一般学生から構成されている、南古谷ウインドオーケストラの練習（演奏）は『地域の音楽芸術に対する意識の向上』に長年に渡って貢献している。	・ニューイヤーコンサートin南古谷の準備・打ち合わせを始める。 （平成29年1月8日開催予定）	・大勢のプロの方々と共に盛り上げる大舞台での一員として出演できたことは、生徒にとって大きな喜び・感動となり、一人一人の音楽感に大きな変化と新しい広がりを与えることとなった。	・来年度も、『国際ソロプラチスト埼玉』に於けるボランティア活動への参加を予定している。
	○ 県内中学校での管打楽器の実践的な指導	・管打楽器専攻生の中に将来、中学校の音楽の教員を希望している現状がある。	・昨年度に引き続いて県内中学校のプラスの活性化と本校のプラスの演奏、指導に対してモチベーションの向上を図った。	・本太中学校における本校ウインドオーケストラの実技指導と演奏会を平成28年5月21日（土）に実施することと決定する。その具体的な内容の検討と準備を始めた。	・本校の生徒が中学生を指導するに当たっては、本校の担当教員より、各楽器の指導内容・指導方法を詳細に渡って生徒に指導することとした。	・本番の2日間は大盛況で会場、サンアゼリア（和光市）は熱気に溢れていた。生徒達は意外と落ち着き、稽古の時より役になりきり声高々に個々の役を立派にこなしていた。	・来年度も、『国際ソロプラチスト埼玉』に於けるボランティア活動への参加を予定している。
○ 音楽専門教育の活性化を図る為に埼玉県近郊の『音楽系高等学校との合同演奏会』を実施。	・音楽教育の活性化を図る為に近隣の音楽系高等学校が参加して、合同演奏会を開催した。ソロだけでなく、今後、様々な形態のアンサンブルが可能検討して行く。（東邦第二高等学校主催）	・『第七回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』を本校が主催し、本校音楽ホールで各校の代表演奏者による演奏会を実施する。本校生徒は全員その演奏を鑑賞した。	・この演奏会は出演者の演奏への意欲の向上と、聴く生徒に演奏者から演奏と向かい合う姿勢を学ぶ良い機会となっていた。	・ニューイヤーコンサートin南古谷の準備・打ち合わせを始める。 （平成29年1月8日開催予定）	・演奏会を通して、『各学校の演奏した生徒達は、それぞれが日々の自分の演奏のテクニック・表現力などを振り返ってみる良い機会となっていた。同時に『音楽系高等学校間の親睦』にも大いに貢献できていた。	・『第八回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』は来年6月16日（土）に開催する予定。学校間の交流を図りつつ、生徒達の演奏技術と音楽性の向上に更に良い演奏会を目指して行くこととする。	